ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2019, No. 46

【役員名簿（2019年６月現在）】（五十音順）

代　表：結城　正美（金沢大学）
副代表：小谷　一明（新潟県立大学）
顧　問：上遠　恵子（レイチェル・カーソン日本協会）
　　西村　頼男（阪南大学名誉教授）
事務局長：辻　　和彦（近畿大学）
事務局補佐：
　　日野原　慶（大東文化大学）
　　山田　悠介（大東文化大学）
会　計：河野　千絵（日本大学・非）
　　浜本　隆三（甲南大学）
監　事：村上　清敏（金沢大学名誉教授）
ニューズレター編集委員：
　　澤田　由紀子（甲南大学・非）
　　菅井　大地（松山大学）
　　豊里　真弓（札幌大学）
会誌編集委員：
　　相原　優子（武蔵野美術大学）
　　塩塚　秀一郎（京都大学）
　　芳賀　浩一（城西国際大学）
　　平塚　博子（日本大学）
　　Bruce Allen（清泉女子大学）
コンピューターセンター：
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　北国　伸隆（長崎外国語大学）
　　山城　　新（琉球大学）
評議員：浅井　千晶（千里金蘭大学）
　　池田　志郎（熊本大学）
　　太田　雅孝（大東文化大学）
　　大野　美砂（東京海洋大学）
　　上岡　克己（高知大学名誉教授）
　　黒崎　真由美（関東学院大学）
　　塩田　　弘（広島修道大学）
　　John Rippey（滋賀県立大学）
　　管　啓次郎（明治大学）
　　高橋　綾子（長岡技術科学大学）
　　高橋　龍夫（専修大学）
　　高橋　　勤（九州大学）
　　高橋　昌子
　　巽　　孝之（慶応義塾大学）
　　中川　僚子（聖心女子大学）
　　波戸岡　景太（明治大学）
　　林　　直生（滋賀大学）
　　巴山　岳人（和歌山大学・非）
　　横田　由理（大東文化大学・非）
　　吉田　美津（松山大学）
院生代表：笠間　悠貴（明治大学・院）
広　報：喜納　育江（琉球大学）
　　塚田　幸光（関西学院大学）
　　松永　京子（神戸市外国語大学）
研究助成：岡島　成行（青森山田学園）
　　管　啓次郎（明治大学）
　　乳井　昌史（早稲田大学）
　　野田　研一（立教大学名誉教授）
　　山里　勝己（名桜大学）
　　結城　正美（代表）

Environmental Generational Amnesia

代表　結城　正美（金沢大学）

世代による環境性健忘症、とでも訳せばよいのだろうか。よい訳語が思いつかず、英語をそのままタイトルにのせたが、この概念を提起した心理学者ピーター・カーン（Peter Kahn）によれば、こういう意味だそうだ。普通の環境とみなされるものは、幼少期の自然体験に基づいており、それは世代によって異なる、ということ。言われてみれば、と頷いている方もおられることだろう。

昭和のある時期までは、ゲーム機が流通しておらず、塾通いも一般化していなかった。そのような時代に幼少期を過ごした人は、学校から帰ったら外で暗くなるまで遊ぶ毎日を送ったことだろう。

私自身、小学生だった40年ほど前を振り返ってみると、子どもは外で遊ぶのが普通だった。

学校から帰ると、とくに約束などしていなくても、子どもたちはなんとなく、年長のガキ大将のもとに集まった。カン蹴りをしたり、探検をしたり、夏には川で魚とり（銛で突くスタイル）をすることもあった。ときには、独りで田んぼの畔に座り、ひたすらシロツメクサを編んで首飾りを作ることもあった。とにかく日替わりでいろんな遊びに明け暮れた幼少期だった。

今なら子どもだけの川遊びは親の許しを得ることが難しいだろう。プールのように底が平らではないし、流れも一様ではない。溺れる危険性のある場所に、子どもたちだけで行かせるなんて…。自分が親になって、当時の親の度胸というか放任主義は、到底真似できないと感じる。

川が危険だということは、昔の親も知っていた。けれども、気をつけて、の一言とともに行かせてくれた。自分たちも子どもの頃にそうしていたからなのか、ガキ大将を信頼していたからなのか。

安全管理の名の下で公園の遊具が撤去されるような現在、子どもたちだけで川へ遊びに行けた時代がほんの数十年前まであったということが嘘のように感じられる。

子どもの安全を願う気持ちは、昔も今も変わらない。

変わったのは、安全を脅かす環境の管理、言い換えれば、危険を排除する思考・行動である。

安全の反対は危険である。だから、安全を求めて危険を排除する

という考えは、理に適っているようにみえる。けれども、人間によって管理された環境で、人は本当に安心できるのだろうか。

池澤夏樹のエッセイ「旅の時間、冒険の時間」(1990年)を読み、安全と安心の違いについて考えた。世界はもともと、未知の不安と魅力をたたえた「自然の時間」に支配されていたが、それとは別の、安全で予測可能な「人為の時間」を人間は発明した、と池澤らしく理知的に議論が運ぶ。人為の時間は安全とほぼ同義とみなしてよいだろう。

> 人間は異常なほどの知力を利用して自分たちの環境をすっかり変えてしまった。正確に言うならば、彼らが変えたのは時間という言葉の意味である。古来人間がやってきた事業はさまざまあるが、最も大きいのはおそらく安全という言葉を発明し、その内容をひたすら改善し、それによって明日を今日に繰り込み、今日を昨日とそっくりにするという大事業と、そのためのノウハウの蓄積だった。これに払われた努力の量はそのまま人間たちの十万年に亘る営為の総量である。その結果、人生は長くなり、思いがけぬ事件は少なくなり、人間の時間というものはカマボコのように均質でのっぺりしたものになった。もちろんそれは実に立派な成果であって今さら文句をつけられる筋のものではないのだが、しかし、どこかで安楽と幸福を取り違えたのではないかという疑問も残らないではない。(池澤夏樹『母なる自然のおっぱい』新潮文庫, 1996年, pp. 119-120)

人間による最大の事業が「安全という言葉」の「発明」であるという池澤の見解は、「安全」の追求が反自然的な営みであることを指摘している。

反自然的だからよくないというのではない。安全に過ごせる環境を求めるのは、ごく自然な欲求である。けれども、安全を求めるあまり、自然の時間や行動様式を完全に締め出し、人為の時間や行動様式で完結する世界がつくられたのだとしたら、その先に何があるのか。そう池澤は問いかける。

昔も今も、子どもの安全を求める気持ちは変わらない。他方で、安全の内容は大きく変化した。かつては、溺れたり怪我をするかもしれない場所でも子どもたちを行かせ、そこで遊ぶ子どもたちの安全を願った。現在は、危険の潜む場所から子どもたちを遠ざけようとするばかりか、危険そのものを環境から排除しようとする。

人間の管理やコントロールが及ばないものを自然とよぶとすれば、昔の安全は、自然に危険はつきものであることを理解した上で求められていた。それに対して、現在の安全は、危険だからという理由で自然を排除する。

自然を排除すると、当然、人間だけの世界になる。

人間の世界には実にさまざまな問題が存在する。ハラスメントとよばれるものだけみても、セクハラ、パワハラ、アカハラから、ジェンダーハラスメント(ジェンハラ)、リストラハラスメント(リスハラ)、エイジハラスメント(エイハラ)、麺類をすする音によるヌードルハラスメント(ヌーハラ)というのまである。

ハラスメントとは、とどのつまり、イジメ、差別、嫌がらせである。そういう問題は昔からあった。昔の方がひどかったと、養老孟司と宮崎駿が対談で語っている。子どもの間でもひどいイジメや差別はあったが、「とにかくみんないろいろ切り抜けて」いたという。しかし、現在は——

> 人間に関心が向きすぎていて、その結果「アイツが気に入らない」だとか「アイツはダメなヤツだ」とか、人間に関しての話題ばかりになる〔…〕。
>
> イジメが深刻になっちゃう根本には、人間ごとにしか関心が向かない狭い世界があって、昔からあったことが、実は拡大されてしまった。いや、拡大というか、世界が狭くなったぶんだけ、拡大されて見えるんです。(養老孟司, 宮崎駿『虫眼とアニ眼』新潮文庫, 2002年, p. 53)

朝家を出て、日中のほとんどを学校で過ごし、放課後は塾に直行して、夜に帰宅する、という生活を送る子どもたちは、徹頭徹尾人間だけの世界に置かれている。

空き地でキレイな蝶に目が釘付けになったり、小さな手足が生え始めたオタマジャクシに惹きつけられたり、雨上がりの草むらのむせるような緑に圧倒されたりしながら、かつての子どもたちは、人間に管理されていない時間をそれなりに経験していた。そのような時間の中で、人間の問題を外から眺める視点を自ずと身につけた。そうやって、学校や家で嫌なことがあっても切り抜けていた。

対談ではこうも語られている。

> 都会というのは人が作ったものしかないんだから、なにが起こったって、追求すりゃあ人のせいにできる。これが自然の中なら「仕方がない」ですむんです。(同上, p. 60)

この場合の「仕方がない」というのは、諦めというよりも、自然の脅威と驚異への感覚を伴う言葉ととらえるべきだろう。

なぜ人間には自然が必要なのか。その一つの答えがここにある。

【大会案内】

2019年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

（2019年８月31日[土]～９月１日[日]）

於　大東文化大学 板橋キャンパス　大東文化会館（東京都板橋区高島平１－９－１）

大会実行委員　日野原　慶（大東文化大学）

2019年度のASLE-Japan全国大会は、８月31日（土）、９月１日（日）の２日間、東京の板橋区にある大東文化会館にて開催されます。自然環境という言葉から多くの人が想像するイメージからは、かけ離れた環境だと言えるでしょう。コンクリートの地面、住宅、高速道路、電柱、電線――これら無数の人工物によって形成される都市環境がそこにはあります。でも、視覚と思考の範囲を少し広げれば、他のあらゆる場所がそうであるように、この都市環境が空につつまれ、大気に接していることにも気づきます。そこに都市の自然が息づいていることも実感します。「文学と環境」という枠組みを通して考えるわたしたちは、実のところどのような環境を理想化し、反対にどのような環境を良くないものととらえているのか。そして、その前提が何を可能にしつつ、何を不可能にするのか。東京で開催される全国大会の実行委員として、そのようなことを問いなおす機会となれば幸いです。

さて、全国大会での個人発表・シンポジウム・企画などを募集するなかで、実行委員としてはこれ以上ない幸せに恵まれました。というのも、締切りまでに、個人発表６つ、シンポジウム２つ、そのほかの企画３つという、非常に多くの応募をいただいたのです。応募してくださった方々、また応募を検討してくださった方々に、この場を借りて感謝を申し上げます。以下、その内容について先取りして簡潔にお伝えしたいと思います。より詳細な情報については、別紙記載の大会プログラムと発表要旨をご覧ください。

まずは**６つの個人発表**。広く括ればアジア、ヨーロッパの作品に焦点を当てたものから、そして地域の境界を越え出ていくような、いわばトランスアトランティックな観点まで、幅広い内容となる予定です。

- **「樹木描写からみる故郷ボヘミアの森への思い：シュティフター文学における森林機能」**
  岡﨑朝美（北海道大学・非）
- **「記憶を刻むplace name：アラスカから東日本まで」**
  神沼尚子（在野研究者）
- **「ワーズワスの『逍遥』における農業と持続可能性」**
  佐々木郁子（龍谷大学）
- **「津島佑子『ヤマネコ・ドーム』における不安、恐怖と時間の表象：ポスト・フクシマの風景とホーム」**
  豊里真弓（札幌大学）
- **「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの二つの「砂漠」：パタゴニアとブエノスアイレス」**
  山田美雪（東京大学・院）
- **「「人民日報」はいかにして自然災害の「真実」を報道するに至ったか：「災難報道」にみる現代中国の環境論的転回」**
  劉霊司馬（明治大学・院）

これらの個人発表に加え、**２つのシンポジウム**が行われます。

- **「カリブ海地域の文学と動物、環境、自然」**
  登壇者：岩瀬由佳（東洋大学）、齊藤みどり（都留文科大学）、中村隆之（早稲田大学）
- **「ドイツとアメリカにおけるダーウィン受容の諸相：ダーウィンとダーウィニズムの距離」**
  登壇者：磯崎康太郎（福井大学）、宇和川雄（関西学院大学）、西尾宇広（慶應義塾大学）、浜本隆三（甲南大学）

カリブ海地域の作家たちに焦点を当てる前者のシンポジウムと、ダーウィンの学説とダーウィニズムとの差異に焦点を当てる後者のシンポジウムは、いまだ探究し尽されていない「文学と環境」という枠組みの広がりと深みをわたしたちに示してくれるはずです。

最後に、**企画が３つ**。まずは院生企画。全国大会の恒例企画となっているこちらは、「院生」と銘打ってありますが、若手研究者たちによる独創的かつ学問的な深みを持つ内容に、毎年感銘をうけています。

- **院生企画：見えない景色を旅する**
  青田麻未（日本学術振興会特別研究員）、伊東弘樹（東洋高等学校）、江川あゆみ（早稲田大学・院）、笠間悠貴（明治大学・院）、谷口岳（明治大学・院）、戸張雅登（立教大学・院）、林真（明治大学・院）、三宅由夏（東京大学・院）

日常的なわたしたちの認識に包摂されない景色が、いかなる形で芸術によって可視化されうるのか――それを考えるのが楽しみです。

これに加えて、**詩に関わる企画**があります。ひとつは、シュルレアリストとして作品を発表、福島第一原発事故以後の福島について『詩の礫』以降世界に伝え続けた現代日本を代表する**詩人・和合亮一さん**をお呼びして、**詩の朗読会**を行うというものです。環境詩の現在そして未来について考えるという試みでもあります。

もうひとつは、カナダはユーコンより**詩人クレア・ロバーツさん**をお招きし、**朗読とご自身の創作の背景**についてお話して頂きます。『ここが私たちの上陸地』（高岸冬詩訳、2018年、思潮社）／*Here Is Where We Disembark*（Freehand Books, 2010）が日本でも高く評価されている詩人の想像力は、いかなるかたちでユーコンの大自然に応答したのでしょうか。それがトークの主題となる予定です。

以上、おそらく猛暑であろう東京にいながらも、わたしたちの思考は世界中を旅することになります。ぜひこの「旅」に参加ください。

【大会報告】

第6回ISLE-EA大会報告

（2018年10月20日～21日　於 国立台湾師範大学）

河野　千絵（日本大学・非）、中垣　恒太郎（専修大学）

穏やかな秋の週末、台湾師範大学で第６回ISLE-EAの大会が行われた。今回のテーマは「戦争と平和（War and Peace）」。現在われわれが直面している環境汚染問題や過去の戦争に端を発して今に続くさまざまな課題などを共有し、語りあう良い機会が得られた。ハワイ大学のVernadette Gonzalez 教授による基調講演の演題は “‘Securing Paradise’ : US Militarism and Ecological Tourism in Hawaii and the Philippines”。以下、概略を記させていただく。

現在ハワイのカウアイ島では、1960年代に始まった「ヘリコプターツアー」が盛んである。これは約１時間をかけてヘリコプターで島を巡る、いわゆるエコ・ツアーであり、地上からは見られない素晴らしい自然の景観が楽しめる。しかし、そのツアーで使用されているヘリコプターはもともと軍用であり、ツアー開始当初はベトナム戦争に従軍経験のある元兵士がパイロットを務めた。ベトナム戦争でヘリコプターは「敗北と撤退の象徴」であったが、カウアイ島の観光ツアーに使用されるおかげで「平和な南国の楽園の光景」を提供してくれるものになった。このツアーは人気を博しているが、教授によれば、良いことばかりではない。俯瞰的・地理学的にカウアイ島を見学する機会が得られたおかげで、そこで営々と続けられてきた原住民たちの文化や歴史に対する視点が希薄になってしまったのだ。

観光産業に軍が関わっている例として、フィリピンの「ジャングルスクール」のことも挙げられた。これは密林での自然体験を楽しむもので、やはり観光客に人気なのだが、そもそもこのジャングルスクールとは、アメリカ軍の兵士たちに密林でのサバイバル技術を教えるものであり、そのために使用される土地は地元の人々から接収され、ガイド役の人々も地元民が動員されたのであった。

このような背景が明らかになると、ヘリコプターツアーやジャングルスクールは、地元の経済振興に寄与しているものの、「相互の利益のために新しく姿を変えた再占領」ではないだろうか、と教授は述べられた。続く質疑応答では、軍とエコツーリズムの手法については沖縄の状況も同じである、とのコメントが挙がった。エコ・ツアーはハワイに楽園のイメージを与えているが、沖縄ではヘリコプターによる利益は無く、不安や危険のみである。教授によれば、ハワイにおいてもフィリピンにおいても軍の活動（存在）と自然保護の両立は疑問であり、批判も多く挙がっているらしい。そもそもハワイのヘリコプターツアーは、軍に対する地元民の反発を和らげる目的で始められたという見方もあり、基本的に軍隊というものは環境に対して負荷になるもので、経済的にも好ましいものではない、という教授のご指摘であった。（河野千絵）

＊

多彩な学会プログラムの中でも興味深い試みであったのが、日本・韓国・台湾からの院生が同じテキストに基づき報告するワークショップ「台湾の現代小説　呉明益『自転車泥棒』を読む」（金沢大学院生の賀樹紅さんが登壇）。作者、呉明益（1971- ）は国立東華大学教授でもあり学術、環境活動家としても活躍している。環境意識を反映させながら、風景、歴史、記憶にファンタジーを織り交ぜる独自の作風で知られ海外の評価も高い。日本でも翻訳版（天野健太郎訳、文藝春秋、2018）が刊行され話題となった。失踪した父親をめぐり一台の自転車の持ち主の変遷を通して、台湾の人々の生活の変遷、近代化の歴史が浮かび上がってくる物語で、台北から東南アジアへと舞台が広がっていく。風景と記憶、動植物の描写なども興味深い観点となるもので、私自身はワークショップ後に翻訳を通してようやく触れたのであるが、なるほどISLEで共有するテキストとしていかにもふさわしい。ワークショップでは「森」や「木」の表象などについての分析を軸にした報告と討論が展開された。東アジアの文化圏を横断する比較文学はどうしても言葉の障壁が大きくなってしまうが、ISLEならではの可能性を感じさせてくれるワークショップであった。

懇親会は大学から徒歩で10分ほどの距離にある「青田街七六」で行われた。日本統治時代の1931年に建てられた日本家屋が現在ではレストランとして公開されている。歴史を感じ、考えながら、心地よくゆったりした時間を過ごすことができた。エクスカーションはバスで移動し、少人数グループに分かれて台湾師範大学の学生と共に「トレジャー・ヒル」をめぐるエコ・ツアー。近代化による都市開発のあおりで取り壊しの危機にあった集落を芸術村として再生し2010年から現在の形で公開している。海外からもアーティストを受け入れる制度があり日本からの参加も多いようだ。

退役軍人たちが住みつき違法建築をくりかえしてきた成り立ちからも、川沿いの崖に位置する住宅密集地が迷路のように入り組んでいる。それぞれの作品展示からアートが環境と政治、そして、風景の歴史と継承と密接に繋がっていることをあらためて実感させられる。

閉会式では学会期間中に撮影された写真をスライドショーにして映像でふりかえる粋なはからいがなされ、運営に尽力してくれた学生スタッフを讃える姿が印象深いものであった。チームワークとホスピタリティに感嘆することしきりの２日間であった。

そして次回2020年はASLE-Japanでの開催となることが発表され、結城正美ASLE-Japan代表により挨拶がなされた。ISLEならではの試みと、手作りで顔が見えるホスピタリティを継承・発展していくことができますように。（中垣恒太郎）

【ASLE-J Grad Journal（院生組織だより）エッセイ】

文学と民俗学のあいだ ー台湾旅行記

伊東　弘樹（東洋高等学校）

昨年の８月、台湾高雄のホテルのロビーで、一層強くなる雨足を眺めていた。台湾中のTVが記録的な大雨を伝えているようで、言語に疎い私でも、明日の渡船が厳しいことは理解できた。蘭嶼への旅は断念するほかない。それでも、同行者の「島への旅はいつも気まぐれ」という言葉を、まだ上手く飲み込むことができなかった。

台東から東南に約90キロ離れた、面積約48㎢の小さな火山島。台湾原住民族(注)のうちの一つである、タオ族（ヤミ族）が暮らす地、蘭嶼。私がこの蘭嶼への想いを寄せたのには、ある一冊の本との出会いがあった。シャマン・ラポガン氏の『大海に生きる夢―大海浮海』（草風館、2017）である。

シャマン・ラポガン氏は蘭嶼出身の作家で、1957年に紅頭村に生まれた。台湾原住民族文学が隆盛した1990年代から創作をはじめ、『冷海深情』、『黒色的翅膀』など、現在までに全10冊を手がけている。そのうち６冊が、魚住悦子氏や下村作次郎氏らによって翻訳され、2017年10月に『大海に生きる夢―大海浮海』が刊行された。

現在も漁師として蘭嶼に暮らしながら、創作活動を行うシャマン・ラポガン氏。しかし、その道は決して平坦なものではなかった。蘭嶼の小中学校を卒業した後、台湾本島の高校に進学した氏だったが、原住民子弟対象の大学推薦入学制度を拒否し、トラック運転手や工場勤務で学費を稼ぎ、自力で淡江大学に入学した。大学ではフランス語を主に学び、卒業後も台北に暮らしていたが、1980年代に原住民権利促進運動に加わる。1982年、蘭嶼南部に核廃棄物貯蔵場が建設されたことを機として反対運動に立ち上がった。1989年には家族と共に蘭嶼へ帰郷。その後は、父親たち古老からタオの伝統的な文化や潜水漁法を継承した。

初の自伝小説となる『大海に生きる夢―大海浮海』には、その並大抵ではない足跡と、南太平洋やオセアニアの島々への旅、そして、情熱的な海へ想いが語られている。

> みなは立ち上がると、年かさのものから順に海に出ていった。原初的な波を追う男たちは、瞬時に村の沖に五十幾艘のタタラを浮かべた。まるで海風に駆られる帆船のように風波を受け、コーヒー色の肌をした男たちの集団は、大きな魚に追われて海面を低く飛ぶ黒い胸びれのトビウオの群れが、胸びれを広げて逃げる一シーンのように見えた。
>
> （『大海に生きる夢―大海浮海』）

そこに広がるのは、「タオの人々と海の自然が、それぞれが分離独立して存在するのではなく、感情の交流を通じてつながりあう生きられた世界」（浅野卓夫「ひと シャマン・ラポガン」『すばる』集英社、2017.９）である。この原初的な風景の底にタオ族の英知（文化）が横たわっていることは疑いようがない。シャマン氏は国家実験研究院の海洋科学研究センターに所属する人類学者でもあった。

私のなかで、このようなシャマン氏の文体が、宮本常一の文体に重なってゆく。「旅する巨人」と称せられる民俗学者の宮本常一も、昭和54年（1979）９月に蘭嶼を訪れていた。自身の記録「台湾紀行」（『宮本常一、アフリカとアジアを歩く』岩波現代文庫、2001）によれば、10日間の台湾旅行のうち、蘭嶼に４日間滞在している。鹿野忠雄・瀬川孝吉らに影響を受けていた常一は、30年以上前から蘭嶼への旅を夢見ていたようで、セスナ機の座席でピョンピョンはねて喜んでいたそうだ。同行者の神崎憲武と共に紅頭村や野銀村を歩き、農家の老女や船乗りの男に話を聞いた常一。彼は日本文化と南方文化のつながりを考える上で、蘭嶼を重要視していた。

> 文明社会は文明社会でひろがりをもち全世界を覆いつつあるが、その底に自然に密着しつつ、地域的な小さな社会が連鎖状にかかわりあいをもってつながっていることを見のがしてはならない。
>
> （『宮本常一、アフリカとアジアを歩く』）

宮本常一もまた、土地から土地を旅し、その連続性や断続性を感じ取りながら、歴史や時代を紡いでいた人である。無論そこには、民俗学という確固たる知を基にしながら、時に文学的な文章でもって発信するという手法があった。私はどこかで、宮本常一やシャマン・ラポガン氏のような文体から、そしてこのような文体をたどることから、新たな「読み」が生まれると信じている。

４カ月後、肌寒い冬の日に、私は東京のとあるカフェで、シャマン・ラポガン氏を前にしていた。本著が鉄犬ヘテロトピア文学賞受賞を果たし、その懇親会に招いていただいたのだ。翻訳された下村作次郎氏との対談を拝聴しながらも、どこかまだ信じられない気分で、いつの間にか会は終わった。しかし、その後、友人たちと歩いていると、打上げをしていたらしい店から、タバコを吸いに外に出るシャマンさんを見つけた。偶然の、ほんのひと時前からの再会に、一座は可笑しさを隠せなかった。手を振りながら、ふかしていたタバコの煙が高円寺の夜空に浮かぶのを見て、私はようやくシャマンさんに出会えた、そんな気がした。

（注）台湾先住民族は公式に、中華民国憲法に記載された呼称として1994年から「原住民」、1997年から修正されて「原住民族」と呼びます。この呼称は権利獲得運動のなかで自ら勝ち取った正式名であり、本文でもそのような理解のもとで、「原住民」または「原住民族」の呼称を使っています。

【シリーズエッセイ　風景のカタチ（6）】

忘れがたい田んぼの風景 ー雲南市掛合町を訪ねるー

中川　僚子（聖心女子大学）

２年ぶりに届いた年賀状が、旅のきっかけとなった。差出人は島根県雲南市の大田淳（おおた・ひろし）さん。奥さまを病気で亡くされた後の日常が淡々と綴られていた。おひとりで稲作を続けておられる。一度お会いしたいという思いが、ふと頭をよぎった。

ずっとわが家に無農薬のお米を送ってくださっていた農家の方だ。夫が作家のK氏を介して知己を得て以来、20年にもわたって。10キロ入る米櫃の縁まで入れておまけがくるほど、いつも気前よくお米が入っている。春夏は、畑で朝採った自家用の葉物も詰めてある。つる菜、高菜など、初めて見る野菜は、調理の仕方の説明を記して。秋冬は、塩漬けのきのこや梅干し、時に雪の下で保存して掘り起こした白菜まで。今は好物となった蕗味噌の作り方を教えてもらったのもこの方だ。

2015年の３月、ようやく娘の大学も決まって安堵したときに、年賀状のことをふいに思い出した。田んぼを見せてもらいたい。子らの成長した姿も見てもらおう。家族旅行の途中で寄せていただけないか、と連絡をとった。

３月末、私の郷里広島から、開通したばかりの高速バスで出雲に向かう。出雲駅でレンタカーを借りて、地図とにらめっこしながら大田さんの住む集落に向かう。快晴。日差しのおだやかな暖かい日だ。

約束の２時を過ぎても辿り着けず、ある民家で道を尋ねることにする。先に降りた夫が玄関先で小柄な男性と話す様子を助手席から見ていると、夫は男性を両手で抱きかかえるようにして挨拶を始めた。大田さんだ。急いで子どもを促して外に出る。電話の声や手紙の文面から予想していた方よりもずっと小柄で、ずっと人懐っこい笑顔だ。家に入っていく最後の道がわかりにくいだろうと、なんと30分前から見晴らしのよい高台で待っていて、ちょうど帰宅されたところだという。

玄関前の納屋には、江戸時代にも使われていたという唐蓑（とうみ）という道具があった。鉄の把手を回すと風が起き、それで籾殻を飛ばして、重みで下に落ちる米とわけるのだという。今も豆と豆殻をわけるのに使っているそうだ。玄関を入り、広い土間の踏み段で靴を脱いでいると、子らは高い框にいきなり上がってしまった。大きなこたつがある八畳に通されて、見上げた天井は黒光りしている。

あらためてご挨拶して、土産の佃煮を渡す。こたつの卓上には、すでに所狭しと食べ物が並べられている。みかん、出雲の縁結びまんじゅう、大皿に几帳面に盛りつけられた自家製の沢庵と、ほうれん草のお浸し。干し柿は、秋に作って冷凍してあったものが、ちょうどよい具合に解凍されている。地元特産の焼き鯖寿司まで調達してくださっていた。

家が建てられた400年前からそのままという部屋だ。昔は囲炉裏があったせいで天井も鴨居も煤で黒くなっている。その代わりに、シロアリが出ることもなかった。昔は石に穴を空けて、そこに柱を立てた。石で柱ごと支えているので、コンクリートで固めるのとは違い、数多くの地震にも耐えてきた。

「なんとか、また一年やってこられました」。コーヒーを出す手は少し震えている。夫に向かって「来られたら、言わなければと思っておったんですが」と言葉を継いだ。84歳になる。息子も孫も、ここに戻って来ることはないだろう。ずっとお米を送っていた松江の方が、定年になって田を引き継ぎたいという話になった。先日、その方がきて今年のために田を耕したところ、という。

お茶だけのつもりで選んだ２時という時間だったが、たくさんご馳走をいただいてしまった。あまりにも申し訳なく、子どもと台所で食器を洗う。その後、大田さんの言う「上の田んぼ」と、大国主命の石碑を見せてもらうことになる。

道路への出入り口は、濃淡の桃の花が左右に満開で、レンギョウが咲き始めている。それぞれの木の根元には黄水仙が花弁を広げ、その下にオオイヌノフグリが青い花を、ハコベが小さな白い花をつける。少し歩くと、緩やかな坂にそって田んぼが広がる高台に出た。さえぎるものがない空は、青が深い。道からほど近いところに大きな石碑が建っている。昭和３年に建立され、のちにこの場所に移動された。今は代わりに義弟がここの田んぼで米作りをしているそうだ。このあたりは多根という地名だが、大国主命（オオクニヌシノミコト）が天下を巡ったときに稲種を落とされたという言い伝えから、「種」にちなんで名付けられたという（この話は『出雲国風土記』にも記されている）。

自宅近くの傾斜地に作った「下の田んぼ」も見せていただく。有機農法を実践する人がまだほとんどいない時代から、農薬を使わずに、奥様とともにクリスチャンとして信仰に拠って守ってきた田んぼは、一枚だけの棚田という言い方がわかりやすいかもしれない。去年はイノシシに荒らされて減収してしまった。イノシシは稲を上手にしごいて食べる。ハクビシンがミミズを探して畔に穴を開けるのも困りごとという。

田んぼが湛える水はすべて雨水だという。耕したばかりの水田の表面は薄茶の藻が浮かんでいるように見える。大田さんは水が漏れないようにと手を水に入れて畔を内側からていねいに直している。まだ寒いだろうと短いブーツを

履いてきたが、やわらかい畔は、踵で強く踏むとたちまちこわれそうだ。慎重につま先で歩く。

田んぼの中ではいろいろな虫がうごめいているらしい。春の日差しをうけて、水面のあちこちで小さな気泡が弾けるような音と動きがある。水が動くと、反射する光も動く。田んぼが生きているのだ。水の中に片手を入れると、意外にも冷たくはない。土はこまやかでやわらかく、そっと指先で触れると、粘りはなく、さらさらとした微細な粒子の集まりのようだ。

円通寺に行くため暇を告げると、「私も行きたいから」と車で先導してくださった。寺を見た後、駐車場でお別れをした。一人ひとり握手をして「また来ます」と言うと大田さんは、「また来てください」と日焼けした顔にたくさんシワを寄せた。

【ご著書紹介】

『ゲーリー・スナイダーを読む　場所・神話・生態』(思潮社、2018年)

高橋　綾子（長岡技術科学大学）

「どうして僕の詩を研究するようになったのか」とゲーリー・スナイダーご本人から尋ねられたことがあります。学部学生の頃、2019年2月に逝去されたドナルド・キーン先生に指導を受けたマイケル・エインジ先生のアメリカ詩の課外授業を通して、「ゲーリー・スナイダー」に出逢ったことをお伝えしました。エインジ先生の課外授業では現代アメリカ女性詩人を代表するアドリエンヌ・リッチやスナイダーの盟友であるアレン・ギンズバーグの詩も読みましたが、スナイダーの自然体験や日本滞在の経歴、そして何より彼の自然を扱う端的な文体の方に心が惹かれたのを記憶しています。

文学環境学会編『楽しく読めるネイチャーライティング作品ガイド120』に「キーワード」があり、「ウィルダネス」、「場所の感覚」、「生態地域主義」でスナイダーについて言及されています。ネイチャーライティングがASLE-Japanの諸先生方を中心に日本に紹介されたときに、スナイダー作品や彼の思想が合わせて紹介されました。また、スナイダーは、山里勝己先生のご尽力により、本学会に二度講演者として招聘されたことがあり、スナイダー研究を志すものとして本学会の活動は欠かせないものでした。

拙著は、一つの読み方としては、スナイダーの想像力の根底に女性性があり、その想像力を発展させて独自のエコロジー思想を構築したと読むことができます。ISLE-EAでスナイダーの『終わりなき山河』を発表したときに、日韓の先導的な研究者に「エコフェミニズム的な視点」であると貴重な指摘を頂戴しました。ゲーリー・スナイダー研究書は他にも諸先生方によってなされておりますが、私の場合は、「エコフェミニズム」と「デプスエコロジー」という視点、そして、2015年の最新詩集までを取り上げたことが特徴なのではないかと思います。スナイダー氏へのインタヴューも掲載しておりますので、皆様のご研究の一助にしていただければ嬉しいと思います。

文献情報（2018年11月～2019年2月）

［2018年11月］

・André Krebber and Mieke Roscher（Eds.）, *Animal Biography*（Palgrave）
・Jos Smith, *The New Nature Writing: Rethinking the Literature of Place*（Bloomsbury）
・Kyle Bladow and Jennifer Ladino（Eds.）, *Affective Ecocriticism: Emotion, Embodiment, Environment*（U of Nebraska P）
・ティモシー・モートン（著）, 篠原雅武（訳）『自然なきエコロジー―来たるべき環境哲学に向けて』（以文社）
・渡辺京二『預言の哀しみ（石牟礼道子の宇宙２）』（弦書房）

［2018年12月］

・Amrita G. Daniere, Matthias Garschagen（Eds.）, *Urban Climate Resilience in Southeast Asia*（Springer）
・Paul Warde, Libby Robin and Sverker Sörlin, *The Environment: A History of the Idea*（Johns Hopkins UP）
・Wade Graham, *Braided Waters: Environment and Society in Molokai, Hawaii*（U of California P）
・正道寺康子（編）,『ユーラシアのなかの宇宙樹・生命の樹の文化史』（勉誠出版）

［2019年１月］

・Donald Wesling, *Animal Perception and Literary Language*（Palgrave）
・Sidney I. Dobrin, *Digital Environments*（Routledge）
・テリー・テンペスト・ウィリアムズ（著）, 伊藤詔子, 岩政伸治, 佐藤光重（訳）,『大地の時間―アメリカの国立公園、わが心の地形図』（彩流社）

［2019年２月］

・Joanna Johnson, *Topographies of Caribbean Writing, Race, and the British Countryside*（Palgrave）
・Peter Templeton, *The Politics of Southern Pastoral Literature, 1785-1885*（Palgrave）
・Scott Slovic, Swarnalatha Rangarajan and Vidya Sarveswaran（Eds.）, *Routledge Handbook of Ecocriticism and Environmental Communication*（Routledge）
・ロージ・ブライドッティ（著）, 門林岳史（監訳）, 大貫菜穂, 篠木涼, 唄邦弘, 他（訳）,『ポスト・ヒューマン―新しい人文学に向けて』（フィルムアート社）

事　務　局　よ　り

■2019年度第1回役員会・総会のご報告

2019年６月２日（日）、聖心女子大学３号館（東京都渋谷区広尾4-3-1）において、第１回役員会が開かれました。まず審議事項として、2018年度会計報告および監査報告、2019年度予算案が提案され、審議の結果、承認されました。また一部役員改選案、全国大会案、郵送回数削減案、会誌データ委託案、2020年ISLE-EA開催案が審議を経て、了承されました。ニューズレターの発行、会誌22号の進捗状況、現会員数、院生組織の活動についての報告がありました。役員会の後、例会が行われました。ジェームズ・スタネスク他著『侵略者は誰か―外来種、国境、排外主義』（以文社、2019）、生田武志『いのちへの礼儀―国家・資本・家族の変容と動物たち』（筑摩書房、2019）の二冊を読む読書会スタイルで行われ、活発な議論がありました。

■2019年度 ASLE-Japan ／文学・環境学会 全国大会のご案内

と　き：2019年８月31日（土）～９月１日（日）
ところ：大東文化大学　大東文化会館
（〒175-0083　東京都板橋区徳丸2-4-21、
TEL：03-5399-7399）
大会実行委員：日野原慶（大東文化大学）

詳細につきましては、ニューズレター、ならびにホームページで告知いたします。会員の皆様の多数のご出席をお待ちしております。ご出席いただける方は、下記のQRコードより出席のご登録をお願いいたします。

https://forms.gle/ewiWUfBsqShok1PVA

＜終身会員制度をご活用ください＞

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、10名の先生方が終身会員となっておられます。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿（エッセイ、批評、書評など）、イベント・文献情報を随時募集しています。詳細については各編集委員にお問い合わせ下さい。

＜会費納入のお願い＞

2019年度の年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号　01300-0-93821
加入者名　文学環境学会
（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

※ゆうちょ銀行以外の銀行から振り込みされる場合は以下の情報をご利用ください。
ゆうちょ銀行　一三九（いちさんきゅう）支店
（店番：139）当座預金口座番号：００９３８２１

広　報　よ　り

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光（hiro2827★gmail.com）までお送り下さい。次回の更新は2019年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J　広報委員　喜納育江、塚田幸光、松永京子

＜会員情報の訂正・更新について＞

会員の皆様にお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに学会ホームページの該当箇所をご参照いただき、担当役員にご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

ネットで様々な情報を検索でき、コンピューターが予測変換・入力をしてくれる時代には「書くこと」の意味も変化していくのでしょう。ただ、Newsletter編集の過程で出会ったある執筆者の言葉も、まだ当分は真実だと思います。「書くという行為って、大きいですね。思い出したかった部分を思い出せました！」これからも論文とは違う形で伝えたいこと・残したいことがあればNewsletterをご活用ください。

NL編集委員会は次号より、新たなメンバーを迎え新体制となります。末筆ながら、執筆者の皆様と旧・現NL編集委員に改めて感謝申し上げます。（M.T）

【発　行】
代表　　結城正美
事務局　近畿大学　辻和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江３－４－１
Tel/Fax: 06-6721-2332（内線3400）
E-mail: twain1910★gmail.com

【編　集】
編集代表　札幌大学　豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡３条７丁目３－１
Tel: 011-852-1181（代表）
Email: toyosato-m★sapporo-u.ac.jp

（Eメール送信の際には、★を@に置き換えて送信してください）